

疼痛緩和チーム（以下チーム）では、フェンタニル貼付剤に関する実態調査を行った。

【方 法】 フェンタニル貼付剤が処方された患者が入院している病棟看護師 64 名を対象に、無記名のアンケート調査を行った。質問項目は、「薬袋からの出しやすさ」などの 12 項目で、「テープ」「どちらかというとテープ」「どちらともいえない」「どちらかというとパッチ」「パッチ」から回答を得た。その 12 項目のうち、重視する項目を選択してもらった。

【結 果】 60 名の看護師から有効回答を得た（回収率 94%）。そのうち、テープとパッチの両剤を経験したことがある看護師は 42 名だった。「薬袋からの出しやすさ」「日付の書きやすさ」「貼りやすさ」「はがれやすい印象」「お風呂の入りやすさ」「日常業務の手間の少なさ」「患者にとってのメリット」の項目は、どちらともいえないが最も多かった。「貼付状況の確認のしやすさ」「貼り忘れの心配が少ない」「自分で貼付する場合」「コスト面」の項目は、テープが最も多かった。「人の助けで貼付する場合」の項目は、パッチが最も多かった。重視する項目としては、「貼り忘れの心配が少ない」「はがれやすい印象」「貼付状況の確認のしやすさ」の順であった。

【考 察】 今回の調査結果より、「どちらにも良い点、悪い点がある」や「貼付確認行動は同じである」などの意見があり、どちらともいえないが最も多かったことから、フェンタニル貼付剤を選択する際には、患者の病状や患者の取り巻く環境を考慮する必要性があると考えられる。重視する項目は、今までのヒヤリハット体験報告と同様に、貼付に関することが上位になり、フェンタニル貼付剤に対しては、日頃から注意を払っていることが考えられる。

18. 当院におけるがん患者へのリハビリテーションの現状と展望 ―シームレスな地域包括的医療の提供を目指して―

山鹿 隆義, 秋山 淳二, 石黒 幸司

(独立行政法人 国立病院機構
高崎総合医療センター)

【はじめに】 当院では 2009 年 4 月に作業療法部門、言語聴覚療法部門を開設し、それまで、理学療法部門のみであったが、多職種での包括的なりハビリテーション（以下リハ）が可能となった。それに伴い、緩和ケアチームへの作業療法士の加盟、がんのリハビリテーション料の施設基準取得に向けた取り組みなど、がんリハへの取り組みを強化している。しかし一方で、当院においてがん診療におけるリハの役割については認知度は低いと言える。そこで、当院におけるリハ科の現状を調査し、今後の課題を検討した。

【方 法】 平成 22 年 4 月 1 日から平成 22 年 11 月 31 までの期間に、がんの治療目的で入院中の患者で、リハ科に依頼のあった患者 79 例（男性 42 例 女性 37 例 平均年齢 72.6 歳）を対象とし、入院日および手術日から、リハ科依頼日までの期間や、転帰等を調査した。

【結 果】 依頼の多かった入院科は呼吸器科 26 例であり、続いて外科 19 例、脳神経外科 13 例、内科 10 名であった。平均の入院期間は 44 日、転帰は自宅退院が 40 例、施設入所が 4 例、療養転院が 8 例、リハビリ転院が 2 例、死亡が 15 例であった。入院日または手術日からリハ科への依頼日までは平均 15.4 日であり、術前からの依頼は 1 例のみであった。

【考 察】 がんの患者は、どうしても臥床を余儀なくされる。廃用は臥床したその瞬間から始まり、その廃用の改善には臥床期間の数倍の時間を「浪費」することとなるためその予防が重要である。しかし、当院では依頼日までの期間や術前からのリハ科への依頼数から、「予防的なりハビリテーション」の展開は乏しい状況と言える。今後は早期のリハ依頼を促すシステム構築などが、今後の課題である。極力、当院での廃用を抑え、QOL をどのようにサポートしていくかを、地域を含めた包括的医療を眺望して、当院でのがんのリハビリテーション体制の整備が必要であると考ええる。

19. 当病院の緩和メニューの選択の現状と問題点

小保方京子,¹ 橋詰かおり,² 高橋 育³

(1 伊勢崎市民病院 緩和ケアチーム

栄養士 2 栄養士 3 緩和ケアチーム
医師)

【はじめに】 がん患者さんはほとんどの場合がんの進行や治療による食形態の変化が認められる。当病院では緩和ケアチームが介入する患者さんに、食べたいが食べられないという患者さんの要望をできるだけ取り入れた緩和メニューで対応してきた。今回、患者さんが希望された食事内容について報告する。

【方 法】 患者さんが緩和メニュー中の特定の食品を追加希望された時に記載される食事オーダーのコメントを用い、平成 22 年 4 月～6 月までの 3 ヶ月間でどのような希望があったか、品目数とその内容を分析した。

【結 果】 全体では、緩和メニューからの希望は毎食 10 品目程度、1 日では 30 品目ほどあった。また 1 食に 1 品希望する患者が 65%、2 品希望が 30%前後であった。4 月は 1 日を通じて 4 品～5 品希望する患者さんが 1～2%あったが、5 月、6 月は 1 品ないし 2 品希望する患者さんが 99%を占めた。食事介入品数は、4 月：909 品 1 日平均 30.3 品、5 月：576 品 1 日平均 18.6 品、6 月：1010 品 1 日平均 33.7 品 であった。メニュー内容は主